

東京女子大東寮・体育館

レーモンドの初期作品

新時代志向 建築設計・土木設計界

A & E

Architecture Engineering

保存へ双方向対話を

東京都杉並区にある東京女子大の東寮・旧体育館の取り壊し計画に対し、保存に向けた要請、取り組みが活発化している。而して、アントニン・レーモンドの初期の作風を伝える建築的価値に加え、女性の自立や自治といった先進教育思想を体現した歴史遺産としての価値も高い。一方、少子化と同時に若者の価値観、生活スタイルも大きく、社会環境は建設時と比べて様変わりしている。このため大学は、学生確保に向けた経営の転換を迫られていることも事実だ。同施設の保存問題には、建築・歴史の価値だけでなく、長年にわたって蓄積された関係者の思いや経済性などの要素が複雑にからみあっている。

建築的意義／思い入れ／経済性 価値への理解必要

東京女子大学にはレーモンド建築が3棟存在し、本館など7棟は登録有形文化財の指定を受けている。大倉副は、指定を受けていない1924年完成の東寮と旧体育館を解体し、2008年度に多目的ホールなど2棟を新築する計画を出している。

この計画に対し、同大学の卒業生らで組織する東京女子大学レーモンド建築東寮・体育館を活かす会（監理房子代表）が、大学の理事会に計画の再考要請書や歴史の詳細書を提出したほか、理事会との懇談会を開き、

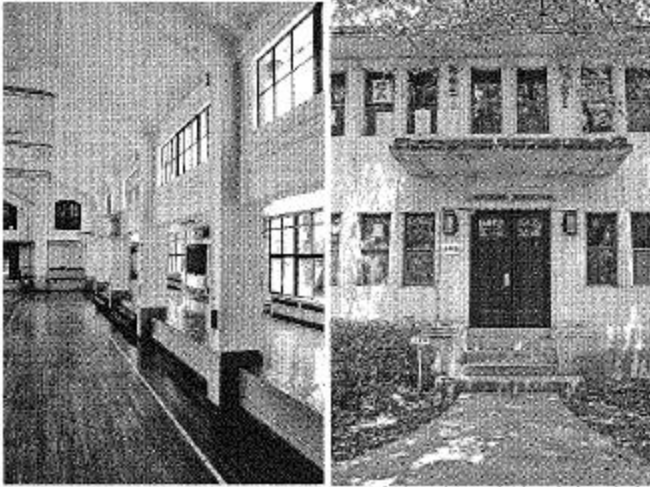
話し合いを進めている。

同会が2日、東京・有楽町の日本外国特派員協会で開いたシンポジウムでは、卒業生の思い入れ、建築的価値、安全性の観点から2施設の保存活用の可能性、意義が話し合われた。

建築的価値について、藤岡洋保東工大教授は「私立女子大の学生寮をRCでつくったのは異例。土足の中に入れたり、パー

ラー（談話室）を設けるなど、新しい女性を想定した様式となっている。また、チェコ・キューレスム風の方立の装飾が、長い立面が単純になることを防いでいる」とレーモンド建築のユニークなアイデアは、いまでも貴重なものだと同指摘した。

西園英和京大講師は、安全性について「関東大震災を経験した建物なので、問題はない。体



社交線の名にふさわしく、旧体育館の床は周囲より一段低くなっている
24年完成、戦前に女性の自立や自治を体現した東寮



パネルディスカッションで建築家の井松社一郎氏は「日本で一番美しい学校」と評した

理事会

活かす会「いい大学に」思いは共通

五大助教授も「保存を支持してくれる大学内部の人と連携できるかが大事。また、7棟を保存する大学側の姿勢を評価した上で、2施設を残す意義を話し合ふ必要がある」と述べた。8000人もの学生が集まる半面、大学側には、保存の意義が十分に伝わっていない可憐性もある。それでも、両者の主張の根底には「いい大学にしたい」という思いが流れていることは確かだ。ある側面だけに備わらない「価値」を演出すべく、声を上げ続ける地道な活動が保存につながらぬことを望む。

一方、根底には経済的な問題が横たわる。シンポジウムに出席した藤田義典日本建築家協会関東甲信越支会副幹事長は「どのように残せばいいのかを、大学内でシミュレーションができれば、働きかけなければならない」と、理事者に意見が言える場をつくる必要性を指摘する。

保存問題に詳しい内田貴敏埼玉大助教授も「保存を支持して